

Title	最近における《自由》の研究をめぐって
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.3 (1960. 3) ,p.283(73)- 294(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19600301-0073
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600301-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600301-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

さらに高性能化が要求されているのである。漁業における小生産者は、最低資本量の増大を強いられており、地域的には、動力化の普及していかなかった北海道、東北地方、裏日本では動力化が進行している。商品経済のより発展していた漁業先進地帯では、停滞或いは下向分解が進行し、小生産者層は、主幹労働力兼業、老人による操

業という形態をとりつつ、層としては薄くなっていくが、なお小生産形態において一部は生産力を上向きさせているといえるであろう。

〔太平洋中区W町及び瀬戸内海E町については「沿岸漁業構造に関する研究」(沿岸漁業構造協議会、山口和雄編) IおよびIII (未刊) 参照〕



### 最近における《自由》の

研究をめぐって

白 井 厚

— Wer Bedingung früh erfährt, gelangt be-  
quem zur Freiheit; wem Bedingung sich spät  
aufdringt, gewinnt nur bittere Freiheit. —  
(Goethe)

#### 一、はしがき

《自由》とは単に抽象的な概念ではない。それはなによりも歴史的であり、ある時には貴族の、ある時にはブルジョアジーの、またある時にはプロレタリアートの自由が、全く対立した内容を含みながら、同じ名の下に主張されてきた。歴史上において、この思想を華やかに展開したのはもちろんブルジョアジーであって、彼らは商品生産の進展とともに、封建的な拘束に対して自由な合理的秩序を要求し、国家権力の専横に対抗して自由主義の伝統を確立した。

しかしながら、一度自由なブルジョアの秩序が形成されると、それに内在する矛盾は美しい理想に反して、多くの社会悪を生じ、弱肉強食の面を露呈してしまった。ヒューマニズムはヒューマニティを裏切り、自由主義は少数に利益を与えて多数者の実質的な自由を否定する結果となった。従って現代における自由は、初期ブルジョア自由主義におけるような政治的・経済的自由を単に主張するというのでは時代錯誤となり、そこに深刻な反省が要求される。自由主義の根底にあった合理主義、個人主義、自我の確立などの近代精神は、改めて現代の状況の下に再編成されなければならない。そこに現代の《自由》のあり方があるのであって、表現や活動の自由を確立するためにも、創造的能力を発揮するためにも、プロレタリアートの生活を向上させ、あるいは積極的に階級対立をなくしてしまいうようなことが《自由》の実質的な条件として要請される……

この辺までのところは、現代の《自由》という課題についてのいわば常識である。しかしながら、学問は単なる常識の体系化ではない。学問は新しい事実に対処して、常識を否定し、のり越え、あるいは深化するものでなければならない。最近は特に、資本主義が大きく変貌し、社会主義もまた着々とその体制を整えるなど、現実がつきつきと新しい事態に直面している。自然科学の著しい発達に応じて、人々の考え方は刻々に変化して行く。われわれは新しい時代の要求を知り、それを実現するために、今日における《自由》の意味、そのため現在の条件を、現代に対する鋭い自覚から考察しなけ

ればならない。

現代の資本主義の特徴は、大体独占の進展、企業構造の変化、技術の進歩革新、新産業の成立、国家の役割の増大、労働者の組織化の拡大、消費内容の変化などに見られる。それに応じて、人間の生活状態も、自由独立な個人を前提とする産業資本主義段階に比べて大きく変化した。すなわち新中間層が大量に生まれますます多くの人口がプロレタリア化したこと、オートメイションの影響が強く現われること、階級闘争がより大規模な形態で展開されるようになったこと、若干の社会保障と市民的自由が認められたこと、生産力の飛躍的發展によって大衆の一部の消費水準が向上すると共に、消費文化が栄え、マス・メディアの発達によって大衆操作がますます可能となったことなどである。かくして「失うものは鉄鎖のみ」であったプロレタリアートは、政治権力に近づく道が開かれ、主体的存在となった反面には、企業合理化の犠牲となり、しかも、形式的な議会民主主義と偽装の祖国を与えられることによってその意識が小市民化し、資本主義の体制内存在として、大衆操作の対象になる。まことに現代の大衆は、《自由》であると同時にそれが内部から侵蝕され、ミルスのいうように「マス・メディアの受け身の対象であり、これらのメディアの流す暗示と操作を無力に口を開けて待ちうけている個人の集合にすぎない。」

(注) C. W. Mills: The Power Elite, 1956, p. 305.

そこで、現代における《自由》の研究の課題は、過去の常識から

## 二、「自由の問題」

現代における自由のあり方について、積極的な指針を与えようとする新鮮な問題提起の書として、まず岡本清一著「自由の問題」がある。岡本氏は、これまでの自由論が、

一、自由が問題にされるばあいの、あの恐るべき概念的混乱が、看過されてきたこと、

二、近代的自由といっても、その特質がふかく追及されないままに、議論がすすめられてきたこと、

三、近代ブルジョア社会的自由は将来どうなるか、近代的自由の社会主義的自由への転化の問題が、あまり問題にされなかつたこと、

をあきたらなく思い、そこに問題の焦点をしばっている。(まえがき) 従ってこの書の価値は、従来の自由論がとかく古典的自由論の祖述に終始したのに対して、積極的に古典的自由論に立ち向かい、これを批判し、現代の自由論を創造しようとした意図にあるといえよう。氏は先ず「自由とは必然性の洞察である」というエンゲルスの説をとり上げ、その自由論はキリスト教や仏教の自由の論理と同じであり、人類が「真剣に考え、そのために血を流してたたかってきた自由とは、まったくちがった自由であることを、われわれはみとめなければならない」(二三頁)といわれる。そしてこの区別をもつて、ガロディ、ルーズヴェルト、ラスキが批判され、《組織にもと

離れて、今日の社会的、政治的、経済的条件の上に立って《自由》の新しい意味を探り、われわれの行動に指針を与えることである。過去のブルジョアの自由は、それが形式的な自由に終わって多くの人々の生活の資を奪ったことによって非難された。この批判は基本的には今日でも正しいけれども、大衆の一部の生活水準が上り、それが誇大に宣伝されてくると、ブルジョアの自由を謳歌する反論が生まれてくる。従って窮乏化の実態の科学的な把握が必要であると同時に、資本主義下における全生活状況の検討——単に物的生活だけでなく——が重要な意味を持つようになった。

自由が政治上、経済上の制度の問題で争われたところに商業資本、産業資本時代の特徴があるとすれば、それが生活権の問題として、さらに疎外意識の問題として提起されるところに、まさに現代の性格が現われているといえよう。疎外は、ここでは資本主義的疎外(商品化)と大衆社会的疎外(官僚機構と大衆操作)という二重の意味を持つ。また同じプロレタリアートの《自由》といっても、市民的自由の確保という《体制内の自由》と、階級社会の廃絶という《体制批判的自由》が、時には社会民主主義とマルクス主義というかたちで争い、時には個人の意識の内部でも抗争する。今日の《自由》はかかる現代的状況の認識を経てはじめて達成される。現段階における真に包括的な自由論はまだ現われていないけれども、以下最近において特に新しい問題意識をもった研究をとり上げよう。

(注) 松下圭一「現代政治の条件」一九五九年、五七頁参照。

づく拘束と自由》《組織にもとづかない拘束と自由》という独自の見解が展開される。

宗教的な意味での自由はともかくとして、エンゲルスが「必然の洞察」と云った時の自由と、人類が闘いによってきた自由とは全く別のものであろうか？ 確かに、哲学者の思索から生じる自由の概念と、血なまぐさい闘いによって獲得した社会的な自由とは異なっている。われわれにとって重要なのは、われわれが合法的に行使し得る権力の限界はどの程度であるか、われわれが欲するところを実現する手段がどの程度保障されているかという具体的な事実である。哲学者の冥想ではない。

だが、ここで注意すべきは、自由は決して真空の中で主張されるのではなくて、歴史的に生成変化するさまざまな条件の中で行なわれることである。必然説は、一方では宗教的服従の世界に通ずると同時に、他方では自由を相対的ならしめるこれらの条件を認識して、その上に立って、そのための自由を拡大するという方向へ向った。自然法論、功利主義という啓蒙思想の中で展開された唯物論と経済学の発達、並びに政治的自由解放の熱烈な主張は、客観的な条件の科学的な把握としての《必然》と《自由》とが車の両輪のごとく対応することを認識したブルジョア実践の最良の成果である。スミスやリカードにおける周知の自由主義は、いずれも経済社会の客観的な法則性の把握の上に立って強く叫ばれたものであった。

そこで一見無縁のように見える社会的自由の主張と、必然の洞

察、とが実は深く結びついていることを洞察しなければならぬ。もちろん最初には、社会的自由はいわば本能的に盲目的に主張されたであろう。だが例えば封建社会内部における商品生産の進展につれて、自由を主張する傾向が強まったことは一つの必然であった。そして何よりも重要なことは、今日では経済関係の社会全体に及ぼす影響がますます大きくなって、社会を規定する経済法則を抜きにして「自由」を語ることは全く無意味となったことである。われわれは今日自然科学の導きなしに生産を行なえないと同じように、社会科学の光に照らされずして社会的自由を主張することは出来ない。必然とは、自然におけると同様に社会における法則であり、自由の存在条件の全体の中に内在するものであり、われわれはそれを認識し利用することによって、自然における場合と同じように、初めて社会的自由を意識的に拡大することが可能なのである。岡本氏の筆は、無条件の自由を求めるにいささか急であつてこの点にふれていない。

《組織にもとづく拘束と自由》《組織にもとづかない拘束と自由》という分類は、これまでの「恐るべき概念的混乱」に対して快刀乱麻を断つべく提起された(氏の問題点第一)。その分類の基準は、前者が学校、労働組合、会社、教会、政党、国家など人と人とを結びつける組織にもとづくもの、後者は台風、蚊、ノミ、泥棒、貧困、恐怖その他われわれが組織関係を結んでいない原因にもとづくものと説明されている。そして与えられた自由の指針は、前者について

は、無政府主義のように権力を否認するのではなくて、その拘束を自分に有利なものに改めること、組織の民主化、人民主権主義、権力制限主義であり、後者については、その拘束力を否定し、これをゼロにまで消滅させてしまうことである。

これは甚だ明快な説明であるが、現代のわれわれの貧困や恐怖は、国家制度と同じように資本主義制度と密接に結び付いているのであるから、それを簡単に二分して別々の療法を示すことが出来るだろうか？ われわれは貧困と直接組織関係を結んでいるわけではないけれども、現代の貧困や不安を解決するためには、ただ生産を増すのではなくて資本主義制度そのものに働らきかけねばならず、そのためには国家権力を動かさねばならない。もしも生産力万能主義でないならば、貧困は組織にもとづかないどころか、まさに国家権力とその根を同じくしていることが明瞭であろう。ノミや蚊の襲来から解放されるという自然的自由は技術の発達によって大部分達成されるのに対して、貧困や恐怖から解放されるという社会的自由は、組織の変革と離すことができないのである。

このようにして、貧困あるいは(資本主義にもとづく例えば失業などの)恐怖を《組織にもとづく自由》の方へ移籍するとすると、その解決はもちろん単なる組織の民主化では済まなくなる。大体民主主義というのは、各人の利益が調和するという前提があつてはじめて円滑に進むのであつて、階級対立から発する難問題を民主主義で解決しようというのは、理想に走つて実は解決にならない。この

点で組合や政党などと国家や資本家の企業などを「組織」の名で一視することは出来ない。前者における自由の指針は氏の説の通りだが、後者においては民主化をはばむ事実とその根本の理由を考へるべきであつた。

だが、岡本氏の論理はこの点で一貫してゐるのであつて、ブルジョアジーの自由とプロレタリアートの自由が等質のものと考えられている。(等質ならば民主主義でかたが付こう。)氏は自由の質を問題とした時、近代ブルジョア社会の自由を一括して《争う自由》とされる(氏の問題点第二)。その根拠を「商品生産社会」に求める説明には、単純商品生産と資本制商品生産の混同が見られるけれども、ブルジョアジーにとって確かに自由は《争う》ためのものであつたろう。だがその意味は、プロレタリアートにとつても同じであつたか？

氏は、労働者が労働力をブルジョア社会的「商品」とすることに成功したのは、スト権を獲得して経済的利益を《争う》自由を獲得した時、日本では実に敗戦以後であるとし、「これは労働者階級が、争いの自由としての近代的自由を、大きくかくとくしたことを意味する。したがつてこの自由は社会主義的自由でも何でもないのである。それは商品と見合うところの、まごうことなき近代ブルジョア社会的自由にはかならないのである。だから近代的自由は、ブルジョア階級のための自由であつて、労働者階級には無縁のものである」というような皮相的な考え方のとりこになつてはいけぬ。」(一二

六・七頁)ととかれる。労働力は、スト権獲得まではブルジョア的「商品」ではなかつたか？ ストによる争いの自由はブルジョアジーのそれと同じ性質のものであろうか？ 私にはそうは思えない。労働者はストを知る前にも、生産手段から切り放され、労働力の販売者として高賃金を求めて傭主を替える契約の自由を認められた時から、まごうことなき近代的商品の所有者であつた。ただ労働力というその商品の特殊な性質から、その販売は傭主の富を重ね自己を零落させる結果となつたのは周知のことである。《争い》の自由競争の前に初めから劣位にあつた労働者は、団結によって自らを守る自由を獲得し、やがてはさらに資本主義の鎖から自らを解放する自由を要求するようになった。ブルジョアジーの自由が私有財産制度と不可分であり、企業の自由を根底とするのに対して、私有財産から疎外されたプロレタリアートの自由は、私有財産(資本)の廃絶によつてかかる経済的な弱肉強食の世界を終らせ、疎外から解放されることを目的とする。これが基本的なことである。だから「労働者階級のたたかいは、けっきょく、かれら(支配階級)のもつてゐる自由を、われわれ(被支配階級)にも平等にあたえよ」ということ(二〇一頁)ではない。プロレタリアートの《体制批判的自由》は、ブルジョア的自由の肯定の上にあるのではなくて、その止揚の上に見求められる。この二つを《争う》という形式だけで同一視することは、逆に皮相的だということにはならないであろうか。こうした近代社会における対立した自由の認識がないと、近代的

自由から社会主義的自由への転化の問題が正確にはつかまれない(氏の問題点第三)。何となれば、後者は前者の延長線の上にあるのではなく、その対極としてのプロレタリア的な自由の実現の上に開花するから。プロレタリアートは「体制内的自由」に満足するのではなくて、「体制批判的自由」をも求めるに至るものであるから。

社会主義への移行について、氏は生活手段国(公)有化主義は時代錯誤的として、国家の社会主義化とともに、企業の社会主義化を考へ、社長を民主的な選挙によって選ぶという「企業体法」を社会主義政党的の下で制定、実施することを提唱している。氏の立論がすぐれて現代的な意識を持ちながら、国家権力や企業体の権力についての分析が弱いこと、その提案が空想的であることについては、すでにほかでも批判があるので省略しよう。全体として云えることは、組織にもとづく全ての問題を民主化の徹底によって解決しようとするところがいささか形式的であり、複雑な経済の実態の政治面への投影だけしか見ていないのではないだろうかということである。実体より先に投影図を動かすことは出来ないものであって、われわれは先ず経済的な現実を直視しなければならない。

氏によると、「二十世紀後半の今日では、『プロレタリアの失うものは鉄鎖のみ』といったたり、『労働者は失業と餓死の自由があるのみだ』などといったとすれば、誰でもそれを誇張だと感ずるほど、事実の方は変っている。『失業と餓死の自由あるのみ』であるはず

方これを強制的に街頭に放逐する。さらに文化の露骨な商業化傾向、ファシズムの危機、消費産業の不均衡な発達などをみよ。たとえ二面において消費生活の内容が上ったとしても、現在の繁栄がどんなにもろいものであるかは近代経済学の人ですらしばしば警告するところであるし、表面の繁栄が必ず裏通りの犠牲の上に成り立っていること、生産力の向上が人間生活の一般的な充実となっていないところに現代の「自由」の問題があるのである。

このような幾多の論争を経ねばならぬ現状分析を簡単に済ましていくところに、また不思議にも資本主義擁護の論をそのままに採って、しかも社会主義を志向するところに氏の論理の中間的、抽象的な性格があるのであって、われわれは氏の意図に対しては賛意を惜しまないにも拘わらず、その鋭い問題意識に敬服するにも拘わらず、現代における「自由」の実現のためには、氏の抽象を越えて現実の体制批判へと眼を転じなければならぬ。民主主義という政治的な解決は、そのための客観的な条件が経済関係の内部において成熟した時にのみ初めて完全に可能となる。理想なき科学は盲目であるとともに、社会科学なき理想は空虚である。

(注) 岡本氏は、台風の法則、泥棒の法則(一〇頁)、卵の法則(一六一頁)というように、法則性を現象面において理解しているようである。そこで宗教的な法との類似が生まれてくるし、社会的な自由と法則性がそぐわないように感じられる。法則性の意味、必然と偶然の関係などを正確に把握することが必要であろう。

の労働者もまた、政治的にはその政党を組織し、新聞を発行し、政府反対の演説会をひらき、さらに社会主義思想を宣伝する自由を持ち、そして多くの代表を議会におくっている。また労働者たちは組合を組織して、一体になって賃金の引上げを交渉し、さらにその要求が容れられなければ、ストライキを行なう自由を権利としてかくとくすることに成功している。このような事実の変化とともに、労働者階級の生活条件もまた、この一世紀のあいだに、見ちがえるほどの向上を示したのであった。このことは誰も否定できないにちがいない。なぜならばこれを否定するとすれば、労働者階級は、その長い奮闘努力にもかかわらず、政治的にも経済的にも、何の成果もあげえなかったということになり、労働者階級の闘争は歴史的に無価値のものであったということになるからである。(四七七八頁)

「自由は政治的にも、経済的にも大きくのびているし、その考え方もすばらしく向上している。」(一六八頁)

果してそうだろうか？ 確かに今日の労働者にとって、「失業と餓死の自由あるのみ」ではないかもしれない。だが「労働者階級の生活条件もまた、この一世紀のあいだに、見ちがえるほどの向上を示した」と簡単に云えない。わが国産業の高い成長率にも拘わらず、われわれは停滞しあるいは低下した労働者の生活条件の例をいくらかでも挙げる事が出来るし、賃金の高い大企業においてすら、産業の合理化によって「鉄鎖」の重みはますます加わっている。新技術の導入は、労働者に対する資本の支配をさらに強化すると同時に、他

### 三、疎外の問題

最近のアメリカには、  
「自由への寄与、そしてまた人類の物質的、精神的進歩への貢献という点で、今日のアメリカ資本主義ほど、他のすべての現存する経済体制にまさるものはない」(Massimo Salvadori: The Economics of Freedom: American Capitalism Today, 1959.)  
という自信がある一方には、

「機械がわれわれを使用する」「大衆が広告の奴隷となる」「今日日……神秘主義者でない限り、ひとびとは何か社会に欠けている点があるのに気が付きだした。繁栄してはいるが、浅薄で卑俗であり、物質的にも精神的にも尊厳さがなく永久性がないと感じだした。」(J. W. Krutch: Human Nature and the Human Condition, 1959.)

と市民生活の類型化と個性の没却に対する反省が盛んである。そしてこれはかんづめとカフェテリアの国アメリカだけのことではなく、昨年翻訳されたJohn Lewis: Marxism and the Open Mind, 1957. などにも Towney の 'the sickness of an acquisitive society' についてのなまなましい記述を見ることが出来る。今日の資本主義に対する診断は、労働者の物質的窮乏のみならず精神的症状にも対処しなければならなくなった。彼らの自由の要求は、物

質生活の向上を求めるだけでなく、同時に人間性の喪失に対して抵抗する方向へと向けられた。われわれはこれらを一括して、「大衆社会における自己疎外への抵抗」と呼ぶことが出来よう。

テクノクラシー、オートメイション、官僚制などにも象徴される現代社会の非人間化―自己疎外の病根に鋭く対決しようとした試みは、すでに一九三〇年代のフランスにおける国際アナキスト・クラブの一員シモーヌ・ウェーヌ女史によって企てられた。われわれはカミュやマルセルが絶賛するその興味あるひらめきを、昨年訳された Simone Weil: *Oppression et Liberté*, 1955. (石川湧訳「抑圧と自由」)によってうかがうことができる。ただし、もちろんその解決はアナキストの方法によっては不可能なので、彼女の社会主義に対する理解などはただされねばならない。またキリスト教の面から人間関係の歴史的考察を通じて自己疎外の問題を追求したものとすれば、ルネサンス以降実存主義、マルクス主義にいたる人間像をとりあげて、現代人間の根本問題を哲学的に解明しようとした宮本武之助「現代キリスト教人間像」がある。

(注) この自信を裏ぎる数々の事実については、W. Gellhorn: *Individual Freedom and Governmental Restraints*, 1956. (鶴飼信成他訳)をみよ。

盛んな思想史研究の一環として完結した「講座近代思想史」には、二巻にわたって第一次大戦後の思想を扱った「疎外の時代」が特集された。そこで山田宗隆氏は、「二〇世紀の後半がもつ歴史的画

期、質的に新しい段階を画した事実を、『眼のまにに』とらえ、これを『じゅうぶん認識し』新しい運動に『参加する』という、科学的責任意識の表明」(一五二頁)としての現代マルクス主義の立場から、マルクスにおける特に類の「疎外」理論を問題としている。

山田氏は、「疎外」の概念がのちの価値および剰余価値の法則、生産力と生産関係の矛盾の法則に止揚されて、ドイツ・イデオロギー以後の著作ではもはや重要な役割を演じていないというヤーン(W. Jahn: *Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von Karl Marx*, 1957.)の説にあきたらなく思い、「疎外」の概念に「対象的世界の実践的産出」「全自然の再生産」「人間の類的生活の対象化」という一連の独自の概念を見る。氏によれば、類的生活には物質的生産と精神的生産の両面があり、前者を対象とするものが経済学であるのに対して、後者を対象とし、その法則を把握する科学は主として哲学である。(氏の野心作と目される「現代哲学の設計」「現代認識論」も、このような精神的生産論を基調としてマルクス主義哲学の硬化現象を打破ろうという試みのようである。)

「疎外」理論は、萌芽的にこの総体をみわたすものであるが、「精神的生産の基底は、生産力の内部での、生産手段と人間労働力との有機的結合に根ざしており、このゆえに、バルカらが指摘した、生産の進歩を直接社会の進歩にかえる、ことを可能にする。むしろ、土台・上部構造に分析せずに、生産力を中心とした生産の全体の脈絡を思想的に意識する

ことこそ、資本主義機構の人為的分断を除去するのに有効である。」(二七一頁)

かくして、氏の精神的生産論は、類の疎外という概念を軸として直接生産力にかかわり、それはまた「古典的マルクス主義が予想したとおりを実現したソヴェト連邦の存続を条件にして、現代では、革命まえの諸国において、部分的に疎外回復の実現が可能になった」(二六三頁)という結論を生み出す。その積極的な意図は、精神的生産の法則の確立と、生産力の直接の意識形態による部分的な疎外回復の立証であり、論理の結節点は、疎外論から精神的生産の思想舞台を引き出すこと、類概念から生産力の直接の意識形態を認めること、にあるといえよう。かくして疎外論はにわかに重要な役割を負わせられることとなる。

それでは、疎外論はマルクスの体系の中でどのような位置にあるのか? 大衆社会論や実存主義、宗教における疎外論に比べてどのような差があるのか? 先ずこれを検討してみよう。

同じ「疎外の時代」(一)において、城塚登氏は、(一)大衆社会論は、どのような現象に現代社会の危機の徴候を見いだしているか、(二)その危機の根本原因をどこに求めているか、(三)危機克服の方策をどのような方向に探究しつつあるか、(四)その危機意識の背後にある理想的人間像はどのようなものであるか、(五)その限界はどこにあるか、という五つの問を出し、(一)大量生産、機能合理的組織、マス・コミュニケーションの登場とともに合理化⇌非合理化、民主化(自

由化)⇌非民主化(独裁化)、組織化⇌原子化、(二)テクノロジーの発達、民主主義の行きすぎ、(三)社会民主主義的方向、小集団の意義重視、(四)大衆社会出現以前の市民社会に生きた市民、(五)資本主義そのものの根本的否定にまで達することがほとんどないこと、などについて説明している。そして「大衆社会論一般において、疎外という事態が社会的現実と個人の感情、意識という二つの場面において把握されるのであるが、その重心がつねに後者に傾き、ややもすると後者のみで問題とされることが多い……いわば個人における疎外の結果の分析だけが前面に進出し、疎外の社会的原因の分析が背後に退くという現象が見られる」(一九八頁)ことを注目する。これらのことは、実存主義や宗教についてもあてはまるのであって、この点にこそマルクス疎外論の決定的優位があるといわねばならない。

マルクスは、一八四四年の「経済学に関する手稿」において、「疎外された労働」と題して次の四つについて述べた。すなわち「労働が生産する対象、労働の生産物は、一つの外的な存在として、生産者から独立した力として労働に対立する。」(労働生産物の疎外)

「労働は、労働者にとり外的なものである、いいかえると彼の本質に属するものではない。……自由な肉体的、精神的エネルギーを発展させないで、彼の肉体をむしろ苦しめ、彼の精神を荒廃させる。」(労働の疎外)

「疎外された労働は、人間の類的存在を、自然ならびに彼の精神

的な類的能力を、彼にとって一つの外的な存在に、彼の個人的生存の手段にする。それは人間から、彼自身の肉体を、おなじく彼の外にある自然を、おなじく彼の精神的存在を、彼の人間的存在を、疎外する。」(類の疎外)

「人間が彼の労働の、彼の生産活動の生産物から、彼の類的存在から疎外されるということの直接の結果は、人間が人間から疎外されるといふことである。」(人間の疎外)

これに明らかなように、ヘーゲルにおける哲学的思惟の疎外、大衆社会論の個人的意識における疎外に対して、マルクスは初めから労働(生産物)の疎外を問題とした。フョイエルバッハの感性的人間に対して、マルクスの把握した人間は社会的生産の下に労働する人間であった。そこにおいては、資本主義制度の否定的な面がプロレタリアートという新しい階級の立場から指摘され、疎外が生産関係と結びついて提起されることによって、歴史的な研究方法を準備し、革命的な結論を引き出すことを可能ならしめた。それは、「私有財産の揚棄すなわち共産主義」という明確な理想を掲げるとともに、歴史的な生産関係の分析によって経済学へ向う道を開いたのである。

しかしながら、そこにはまた初期マルクスに特有のいくつかの欠陥があったことを見逃してはならない。すなわち、そこではまだ彼は哲学者にとどまっていたこと。フョイエルバッハ的な、現実的ヒューマニズムの痕跡をとどめていること。哲学と経済学の個々の領域

し、その基底を生産力に求めるけれども、疎外論自体に未熟な生産関係の把握(搾取関係)はあるにしても、生産力の概念は更に未熟なので(労働過程論の萌芽のみ)、氏の立論は空中分解してしまっている。

氏の論理における第二の結節点は、類概念から生産力の直接の意識形態を認めることである。すなわち「土台の屈折をおして『全生活』を反映するイデオロギー形態のほかに、生産力・生活の直接の意識形態が存在し、じゅうらいの土台——上部構造の二階層論の外に、現実の變革的要素となった生産力とその意識形態を、あわせて考える必要が生じた。」(一六二頁)その例はイタリア労働総同盟の「労働計画」であって、従来生産力と労働者階級はアン・ズィツヒに一つのものであるにすぎなかったが、ここで労働者が自己と区別されたフュア・ズィツヒな生産力に働きかけるコースが生じたときとされている。労働計画というものは確かに非常に興味ある着想ではあるけれども、その実現のためにはいろいろな条件が必要であってまだ一般的な問題とはなっていない。その特殊な問題を、またあまりにも一般的、抽象的な類概念と結び付けることは、その構想まことに雄大ではあるにせよまだ説得力に乏しい。労働計画の実現のためには、生産関係内部における力関係が大きく変化していなければならぬので、これを土台—上部構造以外の直接の生産力と割り切ることに疑問が残る。

氏の積極的な意図の一つは精神的生産の法則を確立することであ

が未分離であり、疎外論は国民経済学(また古典派経済学という概念は成立していない)に対する批判、その前提に対する批判として提起されたけれども、哲学的、超越的であって資本主義生産関係の明確な認識からする内在的な批判ではない。そして実際には資本主義の下における疎外を未成熟なかたちで問題としているにも拘わらず、それは抽象的に私有財産一般の名の下に語られ、資本主義における疎外として特殊化されていない。いずれにせよ疎外論は、従来

の哲学、経済学が自明の前提としていたものを哲学的に批判することによって、歴史的な方法を準備したということとどまるのである。類の疎外という概念なども、社会的存在一般としての人間把握、全自然の再生産などという抽象的な意味では正しいにしても、類的存在と疎外の現実を対比するだけでは不十分なので、その後のマルクスの『哲学的良心の清算』、唯物史観、経済学の確立、階級論、国家論の形成などの道程で、洗い上げ、磨き直してみる必要がある。

さて、以上のように考えてみると、山田氏のように、初期の疎外論の埃をはらってそのままにこれを不動の座に据え、これに精神的生産の法則を求め、現在の革命路線の指示まで仰ぐというのはいかがであらうか。「経済学、哲学手稿」の疎外論は、すでに述べたように他の疎外論に比して体制認識の点ですぐれており、マルクスの思想体系における意義は大きいとしても、それ自体非常に抽象的であり、かつ初期の産物であるという意味において、おそらくその任に耐えないであらう。氏は類の概念の一面に精神的生産を見出

った。その任務は主として哲学に負わせられる。哲学不振の声を聞いてすでに久しい今日、哲学の分野を確定して新しく構築するといふ試みはまことに興味深い。だが精神的生産を何故直接生産力と結び付けねばならないのだろうか? 氏によると「精神的生産部門を、土台—上部構造論で性急にふりきってはならない。たとえば『経済学批判』の序文の史的唯物論の定式——それは、前章でのべたように、生産力—生産関係—上部構造という物質的生産の系列にしばった定式——を精神的生産にしろと、思考的生産のすべてを、上部構造の運命にひきこみ、経済的土台の変化とともに全面的に廃絶されるべきものにしてしまふ。土台—上部構造論は、物質的生産と精神的生産の連関の一部分の法則であり、これを精神的生産の全構造的法則におきかえることはできない性質のものである。たとえば、上部構造は土台に反作用し、あるいは奉仕する、という立言をしても、それはいぜんとして精神的生産の一部の外的な連関をのべているにすぎない。」(一七〇—一七二頁)

たしかに、上部構造奉仕説によって反資本主義的なイデオロギーを資本主義の上部構造から排除しようとして試みられたことがあった。だがそうすると、単に労働計画のみならず全部のプロレタリア的思想を上部構造から下さねばならぬであらう。上部構造は必ずしも全て経済的土台の変化とともに全面的に廃絶されるべきものではない。それは、あるいは徐々に、あるいは急速に變革されるのであって、今日では上部構造の複合性、過渡期における継承が重視され

ているのである(神・小郷編「土台・上部構造論」参照)。

そこで、精神的生活の舞台は、直接階級的な規定を受けるものも間接的なものもあるけれども、結局は階級関係から理解しなければならぬであろう。「人間の本质は、その現実においては社会的諸関係の総和である。」(マルクス「フォイエルバッハについて」選集一巻七頁) 精神的生産の法則は物質的生産の法則と並立するのではなくて、結局は経済的な法則性が貫徹し、個々の上部構造の科学的研究とは、経済法則との有機的なかわり合いを検討することだ——これまでのように機械的に割り切るのではなく——というところに、唯物史観の唯物論としての真の意味があるように思われる。精神的生産論は疎外論から直接に導かれるよりは、疎外論→唯物史観→経済学という発展を通じて、それを規定する現実の客観的な条件の認識の上で展開されねばならない。

氏はさらに、現代における具体的な問題として、頭脳労働と筋肉労働、知的中間層の問題などをとり上げているけれども、「労働者階級が、人間と自然との質料交換の総体を土台に、精神的生産部門を確立するならば、がんらい思想流通をこえて労働者階級の内部にすすみえないブルジョア虚偽意識は、思想工作の余地をもちえなくなる」というような抽象的な章句が目立って、今日の間階級論などの水準とは噛み合わない。現代資本主義においては、社会民主主義などの体制内意識を必然化させる条件の成長こそが問題なのである。最後に革命前に部分的に疎外回復が可能となったという結論で

### 書評及び紹介

F・ビーリー共著  
ペンリー・ペリンズ

#### 『労働党と政治』

(F. Bealey and H. Pelling: Labour and Politics, 1900~1906, A History of the Labour Representation Committee, 1958.)

“Though the political process of the Party were to be won in the twentieth century, its roots lay deep in the economic and social environment that had developed in the course of British history.”

— From Introduction —

われわれはいま、二〇世紀後半の偉大な歴史的転換期に一步をふみ出している。今世紀末期から来るべき二一世紀初頭にかけて、人類は、かつては宿命として考えられていた戦争の惨禍からまぬがれ、あらゆる文明の恵沢を、自由にそしてゆたかに享受する可能性をあたえられているといっても過言ではなからう。このような輝かしい将来が、「一場の夢物語り」ではなく、人間の歴史を創造する不断の努力と、その叡智とによって、やがてはわれわれの手に獲得されることは、歴史的発展の法則によって明らかである。だが人類文明史

書評及び紹介

あるが、「経済学・哲学手稿」ですでに明らかであるように、疎外は基本的には私有財産(資本)制度という生産関係によって生じるのである。資本主義的な大衆社会状況に生きる労働者階級にとって、部分的回復ということは、何を意味するのであるか? 現実の資本主義の中における疎外からの解放が、自家営業的なインテリゲンチヤの着想以上となれば幸いである。

〔附記〕

体制批判的意識は社会主義を志向し、体制内の自由の拡張は福祉国家の思想に結び付く。社会主義における自由の問題についてはすでに数多く論じられているけれども、社会主義体制自体に人民公社などの新しい制度が生まれているし、福祉国家における自由の階級的性質はどのようになるかという問題も今後の検討を要する。

今日の自由を正確に把握するためには、これまでの自由主義思想を現代的視点から検討しなおすことが必要となる。最近におけるこの方面の業績として、「近代思想と現代思想の構造的異質性をするべく自覚することによって」ロック理論を位置づけた松下圭一「市民政治理論の形成」、南原繁「フイヒテの政治哲学」、サルトルの自由論に対する内面的な批判として興味深い寺沢恒信「サルトルとカミュ」などを挙げるべきであろう。

—一九六〇、一、一〇—

上、産業革命やフランス革命に比すべき未曾有の時代に遭遇しつつあるにもかかわらず、現実の政治はいかに混濁と汚辱にみち、われわれの生活は、いかに矛盾と貧困に隣していることだろうか。新聞の伝える「岩戸景気」、自民党のとなえる「安保改定」、西尾新党の「労働者階級の中産階級化」、これらをきくことに、わたしの胸は、やり場のなり怒りでいっぱいになる。そこにあるものはただ、虚偽とごまかしとそして裏切りだけではないだろうか。

社会学者は何よりも現実を直視し、これを理論的に把握する者でなければならぬ。世界が平和の方向へ動きつつあるとき、軍備を増強し、いわんや隣国を敵視する軍事同盟を結び、他国の運命にわれわれの将来をかけることが果して真の防衛に役立つであろうか。生活白書が示すように、一、〇〇〇万人を越える貧困者が、不安な日々をおくっているのに、「電化ブーム」とか「消費景気」などのなやかな言葉に幻惑されて、われわれの生活を真剣にみつめることを怠るならば、それは学問をする者の正しい態度とはいえない。最近のいわゆる「岩戸景気」は、軍事予算の膨脹→独占資本による軍需産業の規模の拡大→忍びよるインフレーションという形をとってあらわれつつあることを忘れるべきではない。たとえば、昭和三四年度を例にとれば、防衛予算は、一、六二八億円で、国民所得全体に占める比率は、一・七パーセントにすぎないとしても、同年度の個人中小業者農民の納める申告納税は、六四八億円であるから、防衛予算はその二倍半にも当るものであり、また同年に勤労